

★私の意見

“心のおしゃれ”を
どうぞ

西田祥風

〈紫水遠州流礼儀作法教室
紫水現代作法の会家元〉



私達が人として生を受けている限り、絶対に成さねばならない制約と、それ程までも厳しくない自由とがあります。装いにしてもそうです。結婚式に喪服を着ては礼を欠きますが、カトレアを胸に付けようと付けまいとその人の自由なのです。

それにしても、人の目に映る装いのおしゃれは美しくなりました。しかし、人の目に映らない心にも「おしゃれ」が必要です。例えば「お早よう」といえば世の義理の済むところを「良いお天気ですね」と付け加え、レストランで支払をする人が、「ありがとう」を伝え、「さようなら」とだけで別れてもよい時に、「お気をつけて」と一こと添えるなど、小さな心づかいをすればよいのです。しかも、上司が部下に、客が店員に、夫が妻にと言ってくるはずもないと思われている人が、何の制約もなくまったく自由な意志により口にした時こそ、心のおしゃれは最高です。あたかも美しいメロディが余韻を残してほのほのとしたものを与えてくれるように、配慮ある温かい言葉は、その人柄の余韻となって心を和ませ一層の親しみを増させます。この余韻ある言葉を巧まずして話せる人を礼儀の心をわきまえ作法を身につけた人といい、心のおしゃれをした品のよい人ともいえます。

また、人の一生はドラマでありその主役は自分自身。舞台は家庭であり社会でもあります。王女のように美しく装った主役には、身から滲み出る気品高い美しさにふさわしい「セリフ」が必要であるのに、私達人生の主役は、ともすれば大事な「セリフ」を忘れ立ちすくんでいるのではないのでしょうか。しかもその「セリフ」つまり心のおしゃれをした言葉を知っているながら、恥らいと迷いのためにサラリと口に出せないもどかしさに焦りながら……。私達は、もう少し勇氣を出してまづ親しい人に「セリフ」の練習をし、次には隣りの人へもその和を拙げ手をつなぎ心を通わせ、舞台をより美しくより感じよく見せるドラマの主役を演じたい。心のおしゃれとは、無形の宝石でありぜひ身につけたいものではありません。



★月刊「神戸っ子」14周年記念文化賞

ブルー・メール賞

第4回受賞者発表 〈副賞各部門拾万円〉

郷土を愛する人々の雑誌、月刊「神戸っ子」はこの三月号で十四周年を迎えました。これもひとえに皆さまの暖かいご支援の賜と深く感謝いたしております。

さて、月刊「神戸っ子」では、神戸の文化を進めるため、ここに第四回「ブルー・メール賞」(青い海)を設定し、各部門別に選考座談会を行ったうえ、左記の四人の方々に賞をお贈りすることになりました。

また、副賞には地元企業のご協力により、各部門の受賞者に十万円が授与できることになり、心からお礼申し上げます。

地域社会の中から世界に通じる文化を育みたく、力いっぱい努力してまいりたいと思います。今後ともご支援のほど、よろしくお願いいたします。

音楽部門



今岡 頌子

〈洋舞家〉

選考委員 吉村一夫・柴田 仁・小石忠男
 昨年のモダンダンスの創作という点で、今岡頌子さんの「空」が非常に印象に残った。その創作においてのすぐれた仕事、また「冬の旅」「道成寺」などにおける企画面での工夫が大いに評価される。今後、そのような創作面での仕事と、後進の育成に活躍してもらいたい。
 (柴田)

美術部門



藤原 向意

〈版画家〉

選考委員 赤根和生・増田 洋・伊藤 誠
 かつて私が〈季節の循環に従う画家〉というタイトルで論評したことのある藤原君が、すでに田園詩人的リリズムを脱皮し、色彩と形体の緊密な連繋による壮大な造形詩の版画家として生れかわり、長い忍耐の冬を耐え抜いて迎えたこの春によって報いられたことを喜ぶたい。
 (赤根)

文学部門



福元早夫

〈AMAZON同人〉

選考委員 赤尾兜子・森川達也・松原新一
福元早夫のなかには、常に何か深い怨みのようなものがうずいている。彼は小説を書くことでその怨みに形を与え、怨みを鎮めようとしているのだが、今度の「工場」でそういうモチーフを表現する適切な方法をつかんだと思う。
(松原)

古典芸能部門



花柳芳五三郎

〈邦舞家〉

選考委員 沼艸雨・佐野漣箕・富田順三
舞台の容姿が美しい。演技力がある。弟子の指導育成は抜群である。社交家である。後援者にめぐまれていた。といったようにこれほどすべてに幸福な人も珍しい。師籍三十年、この積み重ねの成果がこのたびの受賞の一つの理由となったが、さらにさらに舞踊家本来の古典舞踊のすぐれた力量にみがかきかかることを期待し確信している。(佐野)

財団法人 井植記念会

株式会社 そごう神戸店

石野証券株式会社

株式会社 大丸神戸店

ウシオ工業株式会社

株式会社 太陽神戸銀行

オールスタイル株式会社

田崎真珠株式会社

株式会社 神戸製鋼所

バンドー化学株式会社

神栄株式会社

株式会社 ワールド

角南商事株式会社

〈アイウエオ順〉

★副賞協力 会社ご紹介

□なお今回を機に新谷透紀氏(彫刻家)デザインによる海の女神のブロンズ像をお贈りします。

★選考についての各部門協議会を本誌五〇頁より掲載いたしております。



祝
神戸っ子
14周年

KOBECCO 14th

月刊『神戸っ子』14周年記念パーティ

4月4日(金)午後5時30分～8時

於ノオリエンタルホテル2F大ホール
会費orチケット¥5,000(税込み)

プログラム

- 14周年記念セレモニー

- '75ブルーメール賞受賞式

受賞者ノ音楽部門・今岡頌子ノ古典芸能部門・花柳芳五三郎
美術部門・藤原向意ノ文学部門・福元早夫

- '75神戸っ子酒祭り

灘五西会ノサント
リーノアサヒビ
ールノニッカノキ
ンビール協力
〈飲み放題〉

- 昭和50年度ノ神戸酒徒番附表彰式

横綱ノ秋田博正・難波還(東経済人)ノ中西勝・陳舜臣(西文化人)他

- その他唄あり・踊りあり・不景気ふっとばす春の宵に……。

お問合せお申込みノ主催・月刊「神戸っ子」編集部ノ後援・神戸百店会
神戸市生田区東町113ノ1 大神ビル7F ☎ 331-2246

随想三題



元・長尾 和 (主体美術協会会員)

季節がみえる

“渦が森”

長尾 和

〈洋画家〉



「窓から海が見えるのです」

京都に住むある先輩、かわい
一人娘を神戸のA社に勤める青年
に嫁がせ、その新居が灘の青谷に
決まった時の話である。

「窓から海が見える」この明る
い言葉はやはり京都の人のものだ
ろう。なる程、京の窓からは寺や

山が見え、夏の泳ぎも川であつた
り、足を伸ばして琵琶湖というの
が京都の自然なのだろう。

私の住むこの渦が森。阪急御影
から北へ、というより六甲山に向
つて約三キロ、海拔三四〇米と
か。だから当然「窓から海」なの
だが、山の散歩がまた楽しい。

仕事の合間、僅か五分も歩けば
もう樹々の中、家の者に「散歩も
制作」なんだと都合のいいことを
いいながら。勝手な言葉のようだ
が先刻まで苦しめられた画面の解
釈や、その処理、アトリエでは見
えないものが見えることも多い。

散歩もなる程制作の一つなのだ
が、その制作を忘れさせるものに
春から夏にかけての「わらび」が
ある。

私がかどもの頃楽しんだ「わら
びとり」、それは郷里香川県でのこ
と、朝早くから腰弁といういでた
ちで数キロも歩いて山につき、か
なり登つてのもので、もちろん一
日がかかりだった。

だが、この渦が森では腰の弁当
は必要ないし、ツツカケのプラブ
ラで楽しめるのはありがたい。

ある初夏のこと、東京から絵の
仲間来訪。

わが庭を歩くように山を案内す
る。彼等の「わらび」は市場にな
らんだ行儀のいいものらしく枯れ
葉を踏みながらのものは始めてだ

という。「それ、そこに」と、二、
三本も教えたら後はもう勝手に染
しんでくれる。この「わらび」は
きのこなどと違って素人、女人の
別なく誰の目にもすぐ見えて大い
に助かる。

その頃になると夜の酒の肴とし
ても登場、特にうまい肴とはいか
なくとも楽しい肴ではある。

仲間の言葉に

「長尾さん、神戸は港で町かと思
つたら山でしたね、こんな遊びが
あるとは知らなかった。広い六甲
という庭つきのアトリエ、これ
は神戸を離れられませんか」と。

健康にもいいだろうし、「散歩
も制作」ということで春を待つて
いるのだが、この町にも困ったこ
とが一つある。

この間、ぎやるり神戸での個
展会期中の事、霧のような雨で寒
い夜だった。

いつものように車で御影から九
重坂、鴨子ヶ原と登って帰る。と
ころがこの渦が森にはいつたらど
うもおかしい、道が凍っているの
だ。スピードを落としてやっと家
の前に止めたものもう一歩も進
まずガレージに入れる事も断念。

毎年、一、二度経験する渦が森
の冷たい話だが、冬には冬がよく
みえ、春には春がよくみえる。季
節がみえるわが町、渦が森とい
える。

勲章つけて 悦に入り

ジャン・メルオー

〈カトリック彌教公使〉



祝福を受ける筆者（右端）

フランス人の勲章好きを評して「フランセ（フランス人）は、勲章つけて悦に入り」というしゃれがフランスにあります。とうとう私も、このような祝福とひやかしを頂戴する身となってしまいました。昨年の暮に、総領事のジョルジュ・ヤコリエビツチ氏から手紙が来て、「あなたは、パルム・アカデミック勲章を受章することに決定いたしました。おめでとうございませう」と書いてあるのを読んだ、びっくりいたしました。

口の悪い（しかし、腹のよい）友人が早速に私をひやかして、「君があまり怠けているので、フランス政府は、君がもう老大家になつたと勘違いしているのではな

いかね」と申して、二人で大笑いをいたしました。でも私は、これはきつと、「これからはもっと勉強して、この勲章にふさわしい水準に達するように」とのいましめであると思っています。

では、パルム・アカデミックとはどういう意味かと申しますと、古代ギリシア文化においては、パルム、つまりソテツや、月桂樹の枝、オリヅの枝は、自然の周期的なよみがえりを象徴していました。一般に、地中海沿岸の国々では、これらの枝が何かの祭りのしるしとして盛んに使われたものです。そして、この月桂樹は、古代ギリシア人の間では大自然の勝利のしるしであったばかりでなく、オリムピックの勝者に対しても与えられました。ローマ人たちは、戦争に勝った将軍に、勝利の栄冠としてパルムを与えたものです。古代にも、こんにちのようにいろいろなコンクールがあり、例えば弁論大会のようなものの勝利者にも、パルムが授けられました。そして、フランスでは、正確には一八〇八年に、ナポレオンがフランスの大学制度を改革するともに、この勲章の爵位を定めました。これは、たいていは学者や芸術家に与えられるものですが、日本人のかたでもこの勲章を受けたかたはそう少なくはありません。

特にフランス文学の先生や、フランスに行つてカブキを上演したり、あるいは空手を教えたりしてこれをもらつた人もあります。しかし、フランス人にはなかなかもらえない勲章であることは事実です。原則として、フランス文部省の扱う勲章は文化勲章ですが、授与権者は総理大臣です。

去年の九月下旬にやつと勲章が届き、総領事様が数人の友人を誘つて、自分の家で祝賀会をして下さいました。総領事の祝辞はあんまり立派過ぎて恐縮しましたが、その後で私が勲章を胸につけて感謝の言葉を述べた時には、総領事はジャンベンを注いでまわるのに気をとられて、私のせつかくの雄弁術に対してパルムをもう一つ授けて下さるのを忘れてしまったので、惜しいことをしました。でも、翌日の朝、英字新聞に、この祝賀会が盛大であつたという記事が出ますと、すぐに或る友人から電話があつて、「おめでとう。私も数年前にその勲章をもらつたけど、君はそれをわざわざ胸につけて歩き廻らなくても、もう皆が知つていよ」と言ってくれたので、私は、この英字新聞を読まなくて私が勲章をもらつたことを知らない人に見せるのが恥かしくなつて、それをそつと、胸のうちに大切にしまつておくことにいたしました。

キンキラキンの 人生なんて

柳本 薫

(デザイナー)



先日、ある奥様が青い顔で店へ来られた。息子さんが今春、大学受験で、家中緊張感でピンピン。親兄弟迄息をつめる思いでいたたまらないから、一寸、息抜きさせて……との事。慰めたり、励ましたりしました。私も大平洋戦争末期、兵庫県立第一高女を受けたものの失敗し、後の親和を受験する事になりましたが、そこも落ちたらどうしよう、という不安が先に立って肝心の勉強に手がつかなくなったのを覚えています。小学校の首席の女子は県一へ行くというのが当時の自然な進学コースだったので。その学校へ入ることだけが当面の私の全てだったように思っています。

しかし、入試に失敗した折の絶望感、挫折感を味わった事は、これからの人生を生きて行く上に、とても良い経験だと思えます。長い一生の内、一度のブレイキも踏まず、減速もせず、ハイウエーを

ひた走って来たような人が、エリートであり、勝利者であると、どうしていえましょう。

手近な例で灘中、灘高、東大とストリートに進学し、大蔵省へでも入って、遠い将来は、大蔵次官か大臣か……と。そんな人は、私の様な阿呆な人間から見ればそっちの方が人間離れして見えてしまいます。現に知人に一人、それに近い男性がいて、いわゆる絵に書いた様な良家の子弟、三十才はとうに過ぎていくのに、どうしても縁談がまとまらない。私が紹介したお嬢さんの話を聞いても、何処が欠点というではないが、なぜか親しみがわかない、面白くない、フイーリングが無いとの事、その事細かな話を聞いて女同志、ファンと解る気がするのです。彼も何だか、ユーウツそうでエリート中のエリートを自負する割には余り幸福そうではありません。それに比べ、私の小学校時代の友達に、三度大学受験に失敗した気の弱い人がおられます。世間態を恥じる両親に申し訳ないと彼は須磨の海中へボートから飛び込み、自殺未遂に終わりました。遂に、ちゃんとした学校は出す仕舞だったのでしょ。それから何年か経ち、洋服屋になった私は、舶来布地の輸入商としての彼に、仕事の上で出逢いました。あれから彼は某輸入商社

へ入り、何年かの下積を経験した後、一本立ちし、今では社員三十数名を使う会社の社長です。

美しい奥さんと可愛い子供にめぐまれた彼に、昔の挫折感に打ちのめされた面影はありません。私は常勝者は嫌いです。彼等がいかにか才能にめぐまれ、不断の努力をおしまず衆に秀でた人達であってもその才能は花開き、努力はみとめられたではありませんか。私は才能がありながらめぐまれず努力しながらもむくいられない不幸な人達に心魅かれずにはおれません。

敗北の苦汁をのみ、奈落の底へ落ちてゆく様な不安にさいなまれた経験のある人こそ、弱者に對しての思いやりや優しさが、人とのふれ合いにも、味のある、暖かいおつき合いが出来得るのではないのでしょうか？ ナポレオンはロシアで敗れ、義経は頼朝に追われたからこそ、洋の東西を問わず今だに国民的人気があるのだと思えます。それが人の世の情と云うものではありますまいか？

幸せであることは美しい。しかし悲しい事は、もっと深く人々の心の底にしみ込むものです。

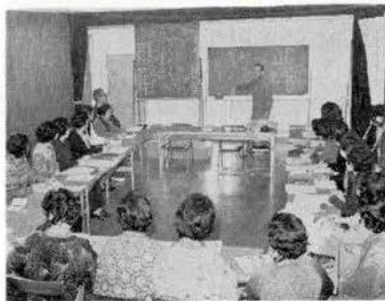
失敗を恐れる事なかれ！ この偉大な地球は、どんな人をもその人の在り様のまま、受け入れ、生かしてくれるではありませんか！

□ある集いその足あと

俳句現代派グループ

平松治子

〈俳誌「青玄」同人〉



神戸KCC現代俳句教室の会場

梅咲くと 浮上の背びれ 色鯉は

伊丹三樹彦

「俳句はもろびと明けくれのうた」と称えた日野草城の遺志を継いだ伊丹三樹彦の編集による俳句誌「青玄」は昨年創刊二十五周年を迎え、関西では三位を下らぬ発行部数で全国的な発展を遂げつつある。

「俳句とは結構なことですがそれがにしても老人趣味ですな」ときまわっていわゆるのは何故か。戦後まもなく「俳句第二芸術論」が盛んでこのままではやがて減びるとまで言われたのは何故か。つまり後

継者がなくなる、若い人には不向きだと言われる最大の理由は文語体への近寄り難さ、わずらわしい季語の約束、古めかしいテーマ等があげられよう。世界中で最も短い秀れた詩型という誇りを忘れず、今使っている言葉つまり現代語で俳句を書こう。季節にはこだわらずもつと現代生活に密着したいわば訴えたいことを書こう——反戦歌よし恋歌よし——季節を無視するのでなく季節感は盛りこんでしかも五・七・五音を基本定型としてリズム感をそこなわぬ程度の字余り等は許して——。いわゆる有季定型派（私達は古典派とよぶ）から出発した青玄ではあるが幾度かの改革、交遷をたどり現在のような「俳句現代派」という呼称を掲げることになった。

しかしこの運動をどうして一般の人に理解してもらうか。答は一つ、主幹自らが先頭に立って普及運動をするための公開教室を——との主旨に基づき三十九年頃から塚口・浜甲子園・西宮・神戸・姫路等に全くの新人いわばズブの素人を対象に主幹をはじめ幹部同人による地道な教育が続けられた。

大阪・神戸等に従来からある月例句会は、いわばベテラン向きの点取り法に基づく研修会で新人には不向きと見ぬいた主幹は、全く前代未聞ともいへべき「添削教室」の

方式を採用。予め黒板に書かれた生徒の作品について一句ずつ懇切丁寧なアドバイスを加えつつ講義を進めるという徹底ぶり。現在の教室は京都よみうりアカデミー・茨木・西宮北口・神戸KCC・姫路KCC等でそれぞれ毎月二回開催。

生徒の方も教科書で習った「古池や」とは異なり最初は戸惑ったが、伊丹三樹彦のユーモラスでしかも熱意あふれる講義、わけへだての無い気さくな人柄に魅せられて月二回の例会日待ち速しく年令や環境の差を越えて、住みにくい時代の谷間に精神的な糧を求めしかも現代俳句を媒体として会員相互の親近感、連体感が深まり、よい人生勉強にもなると喜ばれている。

神戸KCCは毎月第一・第三金曜午前十時から正午まで。午後は有志で神戸名所散策。遠来組は案外これがお目当かもしれない。

海へ返す 迷子の貝のボタン一つ

正子

置きざりのマスカン都心の通り雨

栄子

はじめての眼鏡にうつる犬の涙

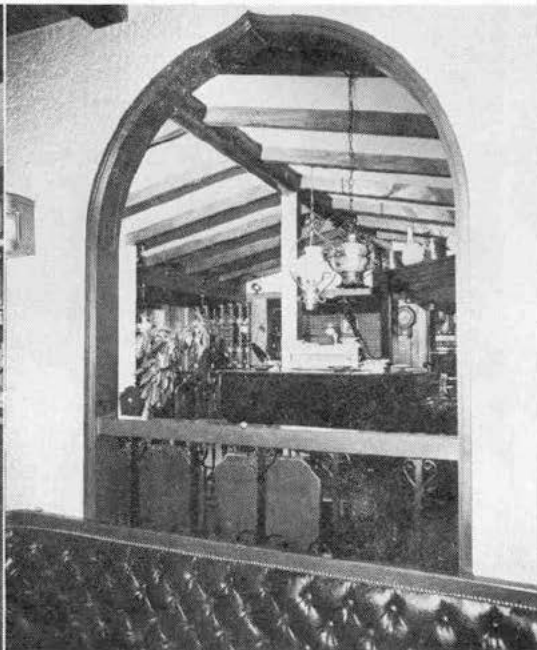
治子

お問い合わせ（会員募集中心）

〒区上南井通六丁目一一二

☎22118580 吉岡博子

新しいとゆうことは いつまでも 古くならない ことです。



NIKKEN MEMORY SERIES 2
神戸らしい、楽しいお店

レストラン ソネ

昭和44年12月3日開店

このお店は5年前にオープンし、1 昨年の秋改装しました。建築も改装もすべて神戸日建さんをお願いしたのは、社長の小野原さんともう20年近くもおつきあいがあるからですが、神戸らしいお店を希望通りにつくっていただいたことを誇りに思っています。店内の絵も小野原さんが学生時代、別所博資さんに絵をならっておられた頃の作品で、なつかしい思い出になっています。

設計がたいへん気に入ってますのでお店にいるのがとっても楽しい毎日です。(曾根桂子)

信頼される



店舗改装のプロフェッショナル

(株) 神戸日建

神戸市葺合区御幸通3丁目1
PHONE 078(251)3525(代)

● 水きりぎりす子文・藤本義一 え・中西 勝

田辺聖子お姉さま



先日、東京某所で、かの狐狸庵先生こと遠藤周作大人と対談した。

自分たちのことを喋り合うわけでなく、おれは田辺聖子お姉上の代理、遠藤大人は佐藤愛子女史の代理という立場であった。

「うちのあれが……」

「いや、うちのあれは……」

といった具合に、双方とも自分の女房のごとく喋り合ったものである。

「いや、うちの……」と喋っているうちに、おれは、そういえば田辺さんとは相当長い付合であると思つたものだった。

二十年経つたろうか。

田辺さんは、その時から変らない。というと、

田辺さんは、

「ギツちゃんも変らへんやんか。一寸白髪が多なつてきただけで……」と喋って下さるのだ。

この人は、裏表のない人だ。そういうと、

「ある、ある。うちかて、裏も表も一杯あるわ」というだろうが、そういうことを臆面なくいえる人に裏と表はない。

この人、われわれ中年男の肩をもって下さるのだ。喋って喜んでゐる中年男を見てまた筆が冴えていくのだろう。

この人の撫然とした顔を見たのは一回だけである。

羽田空港から伊丹へと向う途中であった。

外は雨であった。それも土砂降りであった。

この土砂降りと田辺さんの無然とした顔がとも意外であった。プロペラ時代であり、風雨に弄浪されて、飛行機は浮き上ったり沈んだりしている。

伊丹について、タクシーで一一緒に帰ることになった。

「なにを怒ってはりますのや」

と聞くと、

「ほんまに阿呆らしい」とおっしゃって、

「ホテルでお魚料理を注文したんやんか。なかなかもって来えへんのよオ。(このよオと尻あがり)の言い方が田辺節である)それで、ボーイにねいうたんやよオ。あんた、今、うちの注文したお魚を釣ったはんのンて。そしたら、ボーイが奥へ走り込んで行ったと思うと、支配人かチーフかしらんけどもやって来て、いえ、釣りに行ってるのではありません。只今、料理しておりますので……。」と、こわい顔をしはるのやんか。ほんまにいやになってしもうたんよオ」と、おっしゃったのであった。

大阪流の言いまわしがわからない東京人種、いや、大阪流というよりも、関西流の言いまわしがわからない東京中年に田辺さんは、怒ってらっしゃるのであった。

こういうふうに書いてくると、どうも田辺さんは、わけわかりよすぎる中年には哀れみをもち、わけわかりの悪い中年には怒りをもって対していらっしやるようである。

となると田辺文学には大変な裏があるような気がしてくるのである。その裏は、槍となり、矢となつて放たれ、中年男の胸を抉っているのではないか。

田辺文学を読んでいる女性に聞くと、

「男がなんともコッケイで……」

とか、

「男って他愛ないこといつているなあと思うのよ」

などというのである。

これが二十二、三の小娘から聞くと、おれはドキッとしてしまうのだ。

ところが、わが御同輩なる中年男性に聞くと、

「いや、いや、田辺さんは、われわれの苦しみや悲しみをじっくりととらえてくれているのだ」

とか、

「中年男の悲哀をあれほど暖かく見守ってくださいる女流作家はいないよ」

となるのだ。

この差は一体なんであろうかとおれは考えてしまう。

田辺お姉さまには、裏表がないと思つているものの、本当は、中年男に針つきつけた毒婦ではないかとおそれおののくのである。

はたして、田辺お姉さまは、われわれ中年の味方なのか、それとも、中年男は馬鹿な見本なりと小娘たちに教えを垂れさせ給う人なのかと考えてしまうのである。

「どっちですか」

と聞くと、

「さあ、どっちやろか。ギツちゃん考えてよオ」とやられそうであるが、この不可思議な含みをもつてこそ文学といえるのであろう。

おれの書くもんなんてストレートで、これは、ヨミモノであり文学ではないと、しばし、頭をかかえとるんですよ、お姉さま。

落着かない夜に

矢崎 泰久

〈話の特集編集長〉

え・小西 保文

「あ、痛いっ」

それは、小さなつぶやきだったが、私をハッとさせるに十分だった。私は、離れて、彼女の顔をのぞき込んでやさしくたずねた。

「どうしたの」

「だって、痛かったんだもん」

「どこが？」と私。

ここは港。夜の灯が風に揺れている。私たちは、突堤の端にたたずみ、時折り口づけを交していたのだった。薄い光の中で、彼女の顔だけがほの白く浮かんで見える。唇のところに、血がにじんでいた。

「唇が切れている」

私は、そういって、舌の先で彼女の血を受けた。ピリッとした酸味が私の口の中に広がった。奇妙なことに、何かが深まるような気がする。何故か、わからなかった。「どうして血が出たんだらう。嚙んだりしなかっただろ



う？」と私。

「違ったときから、ちょっと痛かったの。だって、あなたの唇が、ひどく荒れてるんですもの」

彼女に云われて、私は、手を触れてみた。かなり乾いていて、ところどころささくれている。多分ホテルの暖房をつけ放しにして寝てしまったせいだろうと私は説明した。

「今夜もホテル泊りでしょう」

「うん」

「ね、わたしの家へお泊りなさいよ」

私は返事に困った。彼女の家は西宮にあった。二度ほど送っているの、外見は見知っていた。高級住宅地にしては小じんまりしていたが、なかなか作りのいい、趣味の悪くない二階家であった。まだ、ハタチそこそこのしかも箱入り娘ともいうべき、一人娘が突然、男友達を連れて帰ったら、両親はどう思うだろうか。まして、私

は彼女に似合うような年令ではない。どちらかといえば彼女の親に近い年令であった。

「今日は、もうホテルに荷物も置いてあるし、あしたの朝、人が訪ねてきたりするから……」

私は、遠回しに断った。

「じゃあ、この次、神戸へ泊るときは、ホテルを予約しないですね。いいでしょう。うちは暖房で唇や肌が荒れたりしないから、ね」

私は、あいまにうなずいた。それから、一月経って、私は神戸を訪れたが、彼女との約束は、すっかり忘れてしまっていた。三の宮のコーヒー店で待ち合せて、久しぶりで彼女と会っても、その日、彼女の家へ泊る気持もなければ、考えもよらなかったのである。

「わたし、今日は車を運転してきたの。ずっと二人きりでいれるし、このごろのタクシー感じ悪いでしょう。送迎つきだから、一泊いくら取ろうかな、ウフフ」

入ってくるなり、彼女はひどくはしゃぎながら、そんなことをいった。それでも、私には、まだピンとこなかった。

「荷物は無いの？」

「ホテルへ置いてきたんだ」と私。

「嘘つき、わたしの家へ泊るっていったじゃない。ごはんだって食べられるようになってるのよ。いや、そんなの」

私は、正直、驚いてしまう。そんなことできるはずもない。第一、好きな女性の母親に会うことは、苦手である。たいていの場合は、初対面から、いろいろ質問され、返事できないようなことも、こちらは、たいがいかかえていて、油汗流したり、妙な口約束をしてしまったり、考えただけで恐ろしいのだ。

「迷惑だから、いいよ」

「いや、そんな理由にならないわ」

こんな押問答を、ずいぶん前にやった記憶があった。どういうわけか、そのころは女友達がいっぱいいて、そ

の中の一人で、私がかなり好意を持っていた女性だったけれど、誕生日に家へ来てくれといわれて、何とかそれを逃れようとした。その女性は、きつい眼つきで、最後にいったものだ。

「やましいんでしよう。そうに違いないわ。両親にでも会って、結婚の話なんか出たら、どうしようって恐れているんでしよう」

私は、遠い気持になって、それっきり、その女性と会わなくなった。いやな思い出だった。恋をして、やましいと思ったことは、ただの一度もない。誰に対しても、やましくなんか無い。まして、自分にやましさを感じるくらいなら、女性を好きになったりはしないだろう。恋に弁解など、あるわけもないのだ。

「ね、何考えているの。ホテルへ寄って荷物を出して、わたしの家へ行きましょうよ。そして、朝まで、ずっと一緒よ」

私は、もう何もいわなかった。彼女の車に乗って、西宮へ向った。これしかないのだから、これでいいのだろうと思っていた。

「ここがわたしの部屋。居間はこっち。年寄りくさい家具のある部屋が母のお城」彼女は家の中を案内しながら上気嫌だった。家の中には誰もいなかった。

「ご両親は？」

「どこへ行ったのかしら、きっとそのうち帰ってくるわよ。気にしないで……」

食事をして、風呂へ入る。そして、私は、彼女の部屋で、一緒に床に入った。ひどく落着かなかった。明け方ちょっと眠っただけだったようである。

「ご両親、帰ってこなかったみたいだね」朝食を就りながら、私はたずねた。彼女は、首をすくめるようにして「はじめっから、留守だったの。でも、しゃくだから……」と、いつて笑い転げた。

したたかではあったけれど、あの笑顔は一生忘れることはないだろう。

頭蓋骨に驚いて

河 口 龍 夫

〈造形作家〉

パリ・ビエンナーレ展の出品作品のための多種の材料と道具が、I・A・T運送会社から、私の手に届く迄、ただ待っていても仕方がないので、パリ市街の散策としゃれこんだ。パリの地下鉄も美術館の往復で少しは慣れたし、地図を見ながら身勝手にぶらぶらすることは楽しいものだ。パリ・ビエンナーレの作品でただやっきになってゐるだけでは、パリに来たかいないかというものだと思ひながら、第七回展の会場であったバンセヌの森近くに出かけた。野外が主であった前回展の作品がもしや残ってれば見たいと思ったからなのだが、どこを見渡しても、跡形もなかった。後でわかったのだが、私が元の会場と思ひこんでいた所とは少々離れた所が会場であったのだ。どうりで作品が見つからないはずだ。どうやら会場は植物園か動物園の中で、私は外ばかりをうろついていたのだ。そこで出合ったことを思い出したが、フランス人は人種偏見がない民族で、その点では好感が持てるが、驚いたことに、どこ

から見ても外国人で、それも日本人、地図を片手のツーリストに、平気で「植物園へ行くのにはどう行ったら良いのですか」と尋ねるのである。そのようなことは、その時だけでなく、約一カ月少々フランスに居る間何度かあった。まったく近くを通っている人なら誰にでも尋ねる感じだ。一度など車に乗っている人が、わざわざ私のそば迄車を寄せてきて尋ねた時など、最初、交通ルールを無視したかなにかで、注意しに来たのかと思つたほどだ。

森は大変静かで、久し振りの自然にすっかりうれしくなったものだ。あちらこちらで、鉄の玉ころがしをして遊んでいる。ベンチに座って太陽の光を満喫していた時、二、三才とおぼしきかわいらしい男の子が、家族から少し離れて、いたずらをしていた。そのいたずらは子供らしいいたずらではあるのだが、フランス的の公共道徳に反していたのだらう、一人の大人に突然こっぴどく叱られていた。やがてその声を聞きつけたその子の母親



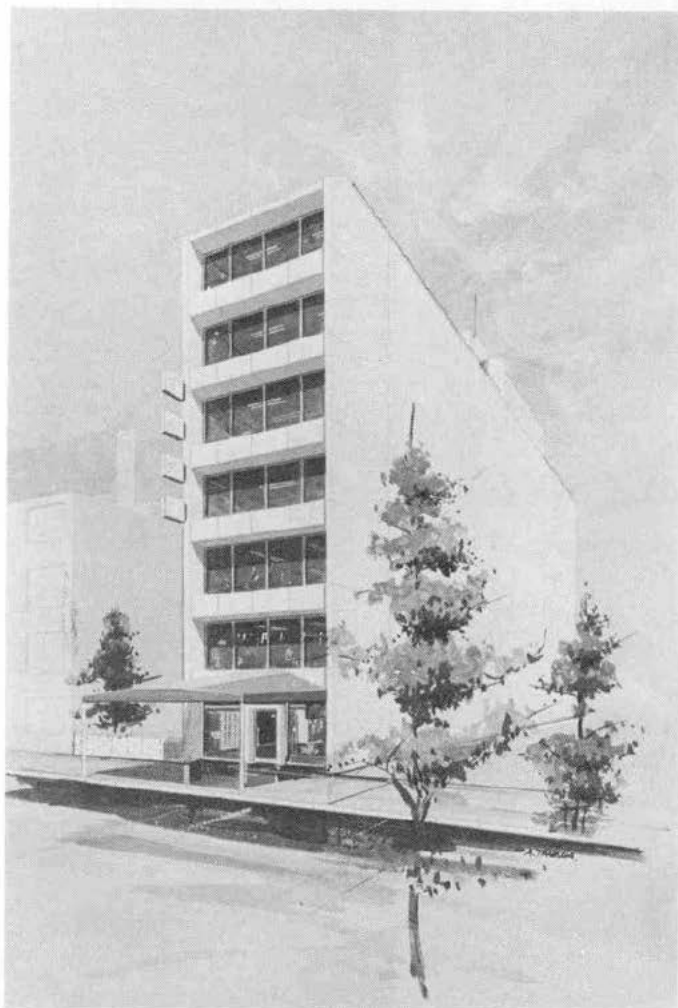
「人類博物館」のあるシャイヨー宮での筆者

が駆付け、その大人に「うちの子供に何をしますか」と喧嘩になるかと思ったが、事情を聞いて逆にお礼を言っていた。まさに子供を私有と考えるのではなく、未来のフランスをになう共通の財産と考え共に注意しようといったモラルが感じられ、その点日本とは相違しているなと思った。国立近代美術館の近くに、シャイヨー宮があって、その中に、「人類博物館」がある。日本を立つ前にぜひ見ておいたが良いとある人から熱心にすすめられていたので、見に行った。原始から近代頃迄の人類に関するあらゆる民族学的な資料がぎっしりと展示されていた。人類の発達の史的な展望のコナーがあった、類人猿からはじまって、さまざまな人骨特に頭蓋骨がならんでいた。最初

は、私も美術品かあるいは歴史的な文化遺産をながめているような態度で、例えば知性の発達と共に頭蓋の形態がこのように変化したのだなどといった見方をしていたが、突然どきりとした。何故ならその頭蓋骨達が、生命を持って古い過去に生きていた事実が気がついたからだ。その事実を棚に上げて見ていたとは、うっかりしていたといえはうっかりしていたものだ。今は生きていた実体を消去してしまった残骸達が、逆説的に何年頃に人類らしき者がいたことを説明しているのだ。私の頭の中にもある頭蓋が、あらゆる表情を失ってただならんでいるのだ。しかし「生きていた」ことに気がつくのと、人類の歴史は、すさまじい厚みを持っている証として私に圧倒的に迫ってきたのだ。頭蓋骨達から不思議と死を想起しないで生を想起したのは、自分でも意外であった。それはたぶん、死から出発する一つの見方のシステム化のためであり、他の物質となんら変わりなくならんでいるたんなる物質からの出発の視点のためであろう。

さまざまな石器類のならんでいるコーナーでは、ホモ・ファベルとしての人間観とホモ・サピエンスとしての人間観の分離あるいは複合を歴史的にたどってみたい欲望を感じたものだ。

国別にならべられた民族資料のコナーでは、それぞれにおもしろさがあったが、日本のコーナーを見て、少々割り引いて見ないといけないなと思った。いずれにしろ民族というのは不思議だと思った。私も、いかにそれから逃がれようとしても、好むと好まざるにかかわらず一つの民族として一種の規範のようなものを今度の旅行で感じさせられたものだ。しかし、民族主義よさらばだ、と言いたい。



マキシン本社ビルが
3月12日
オープンします。

■3月13、14、15日春夏の新作発表会

- 1 F ショールーム
- 2 F 卸販売
- 3 F オリジナル製作部
- 4 F 卸販売
- 5 F 企画部
- 7 F 常設ショールーム

婦人帽子

マキシン

マキシンの帽子のおもとは全国有名百貨店でどうぞ
神戸・トアロード 東京・銀座3-2
TEL(078)331-6711~3 TEL(03)535-5041
増設 331-9511~2

□対談□ 洋ちゃんのニューヨーク語り

アメリカも 人脈やでええ!

竹田 洋太郎

田 中国 夫

〈在ニューヨーク〉

〈関西学院大学教授〉



★ニューヨークでゴキブリホイホイ

田中 洋ちゃんが「神戸っ子」に書いて送ってくれてる記事は大変面白いね。私はまずそこを読んで切りとつてためてるんですよ。

最新の情報やし、リアルやから、みなわかるんや。私もそれをテキストにして学生に講義をしたらんです(笑)

竹田 そうですか。申しわけない(笑)

田中 あなたのアパートで管理人のおばさんが誰かとウクライナ語でしゃべつとるという記事がありましたね。ウクライナ地方から新天地を求めてアメリカに来たというミュージカルが例の「屋根の上のバイオリン弾き」や。

竹田 あれはウクライナ系ユダヤ人ですね。ウクライナ出身のユダヤ人というのは、たとえば彫刻家のザツキンがいますね。シャガールもそうじゃないですか。ウクライナ出身のユダヤ人というのは美術史のなかで大きな位置を占めてますね。

田中 ああ、そうですね。

竹田 先生に手紙で書いたけど「マイ・フェア・レディ」というのは言葉の違いがイギリスの階級社会となっているのがテーマなんです。

田中 動詞がちよっと違っただけでどの町の生まれで、

どんなことしとったかがわかるんやね。

竹田 ところでボクのビジネスをいうと人が笑うんやけど、ゴキブリホイホイしたらんです(笑)。ニューヨークはゴキブリがいっぱいいるからこれ売つとるんです。うちの会社はいろんなことやつてるんですが、主な仕事はニュージャージーのポーツニューアークという港に日本のトヨタとホンダが入つてくると、航行中にサビ止めのワックスを車に塗つてくるのを落して、へこみを直し、きれいな形にしてディーラーに渡す仕事なんです。まあ、トヨタとホンダの下請会社ですね。その他にいろんな仕事もしてるんですが、タマタマ一昨年からゴキブリホイホイやつてるんです。中公新書で「アメリカの流通革新」という本に、アメリカでは流通機構がいかにストリートであるかということが書いてありますが、あれはみんなウソですよ。人脈ですよやっぱり。

田中 ああ、そう。やはりね。

竹田 日本で言えば東大出みたいなもんやけど、アメリカでは人脈に人種や宗教がからんでくる、その人脈をどういうふうにしてつかむかはこれ、五里霧中ですよ。ゴキブリホイホイ売るとなるとスーパーマーケットから市場のオッサンからいろんな話を聞かんならん。聞いているとやっぱり人脈なんです。何が流通革新や(笑)

田中 日本とおんなじやね。

竹田 物の流れは人の流れ、人の流れは情報の流れ、そして金の流れや。人、金、情報、物の流れは複雑きわまるものです。

田中 そういえばアメリカいう社会は実力本位いうけどあれはウソやね。

竹田 そうや。もちろん実力は大事で、日本以上にフリーな社会やけどね。フリーというのは非常に危険な社会でもあるわけや。

田中 アメリカの大学には寄宿舎があり、男はフラタニティ、女はソロリティといい、ギリシャのタイ、ベーター、ガンマーというように別れており、一番いいのはファイベーター・カップといますが、60人づつぐらいが宝塚ホテルのような寄宿舎に住んでるんですね。そういう宿舎は成績のいいので集っていたり、宗教や人種で集ったものもあるし、専攻科目でつながったのなど、いろいろあるわけです。授業が終るとみなキャンパスの中のその結社みたいな寄宿舎に帰るそうですが、卒業するとハーバード出たとか、ミシガン出たとかいうよりも、ミシガンのどのソロリティとか、どのフラタニティを出たかというのが重要なんです。日本流に言えば早稲田のラグビーを出たとか慶応のボート部を出たとかいう感じで、その方にウェイトがかかるんですよ。

竹田 ファイベーター・カップというのが一番有名で、そこ出た奴は貧乏してもファイベーター・カップのネクタイピンをつけとるんです(笑)

この前ニュージャージーのモンモスカレッジで、フラタニティのイニシエーションで砂にうずめて上から水かけて窒息して死んだという事件がありましたよ。

田中 イニシエーションというのはかならずそういう儀式があるんです。

竹田 モーニング着せてブルーへほりこむとかね。それ

アメリカという国は人種のもつばよりサラタ鉢のような国やなあ。

田中 国夫さん

ぞれのフラタニティやソロリティで決った儀式があるんですが、モンマス・カレッジの場合は、黒人の非常によくできる生徒でしたが、海岸の砂にうずめて何時間か辛棒させるのですが、そこへ雨が降ってきて砂が重くなり、出られなくなって窒息して死んだそうです。

ニューヨークタイムズのニュージャージ版に載っています。

田中 おもしろいですね。その話は。私はミシガンにおつたんですが、そういう特別のグループに入るためには荒修業させられるわけで、男の場合は一週間裸で除雪作業をさせるとかいろいろありますね。それに合格すると地下で一切の外部の者を入れないでギリシャの古式にのっとり儀式を行い、その所属グループがその人の一生につきまといいく。

竹田 大人の社会でもロータリーやライオンズやキワニスはオープンですが、オープンでないクラブは無数にあります。結社の規則はクラブ員以外はわからないんですよ。私の住んでます「ウエストニューヨーク市政七五周



年大バレード」の時には結社の連中は結社の制服着てズラーツとバレードするんです。結社の一つの条件は何かという結社が金出しあってお酒のライセンスをとり、小さなバーみたいなものを開くんです。その代り会員以外は絶対入れない。そして会員になるためにはイニシエーションがあり、公式の行事には奇妙な制服を着て出てくるんです。

田中 なるほどね。

★アメリカはサラダ鉢の国

竹田 ニューヨークは何の街かというと、大ざっぱにいえばジュレイツシユ・アイリツシユ、イタリヤンの街というけど、人口的に一番多いのはスパニツシユ・スピキングですね。ところがパークアベニューを一番えらそうにして歩いとんのが日本人や。ニューヨークは日本人の街やといわれるほどウロウロしてる。

田中 私は41才の時アメリカへ行っただけど、それまでは同一民族、同一言語の日本で生活していたので、アメリカには多種多様な人間が住んでいるということが実感としてピンとこなかった。アメリカというのは欧州共同体のようなもので、いろんな国の人間が集って一つの国をつくっていく実験をしているようなもんやね。

竹田 成功したり、失敗したりしてね。

私の住んでいるウエストニューヨークは人口、四、五万で住民の70%がラテン・アメリカンで、その60%がキューバのレフュジイです。だから商店街は完全なラテンアメリカムードで、スペイン語の方がよう通じる(笑) ニューヨークの地下鉄でもブロードウェイラインはスペイン語の方がよう通じます。広告はスペイン語の方が多い。

田中 それは気がつかなかった。

竹田 五番街でも南の方へ行くとヨーロッパからの移民

でドイツ語やフランス語も多いし、専門店の売子はフランス語、ドイツ語、スペイン語などを使いわけてる。だからどこで英語しゃべつとらんかいなと思うほどや(笑)

田中 それがニューヨークやな。おもしろいなあ。

アメリカというのはるつぽか、サラダ鉢かといわれるんですが、るつぽでなく、サラダ鉢のようですね。るつぽというのは化合して新しい物に変わっていくわけですが、サラダ鉢というのは中に入っている野菜はそれぞれそのままですからね。

竹田 立体的モザイク、といってもいいですね。

田中 最近はそのそれぞれの国の人が、それぞれの国の特色を發揮しようとしているようやね。

竹田 アイデンティティイですよ。自分は何物かということ自分で考えた主張したいんです。逆にいうとハワイやカリフォルニアの日系人が今まで日本語を知らなかったのが、俺は日本人だということで日本語の勉強をはじめている。

竹田洋太郎さん

ボクはユダヤ人尊敬しとるんです。あのネバリは日本人にないですよ。



しかし、これにも難しい問題があるんです。たとえばユダヤ人は今から10年ほど前までは自分がユダヤ人であるということを見せないようにしてたんです。この頃は「俺はユダヤ人だ」という。それがたとえば「正統派、オールドドックス、ジュネーション、コンサーバティブ」、「リフォームド」と三つの型があるんですが、すべてのグループが「俺はユダヤ人だ」といい出したんです。

田中 ホォー、そうですか。

竹田 ボクはユダヤ人を尊敬してるとるんですよ？

田中 それはまたどおして？

竹田 あの粘りというのは日本人にはないですからね。粘りがあるのと、理屈が決ったら態度ははっきりしてグズグズしないですからね。しかし、そこへいくまでにアイリッシュユアタリアんだつたら一週間かかるところをユダヤ人の場合は二カ月かかります。同じことを20回しゃべれ、いうたらしやべりますよ。一つの例はウォータージェット事件を追求したワシントンポストの二人の記者がいましたね。私はあの二人はジュネーションだと思いませんよ。あの粘りはジュネーションでないと出ないです。「ニューヨーク・タイムズ」は社主がジュネーションですが、アメリカのすぐれた新聞記者にはジュネーションが多いんですね。それは何やいうと、粘りなんです。

★音楽がファッションを生むんや

竹田 ニューヨークは既製のファッションでは世界をリードしてますね。高級なものにはバリとかミラノとかありますが、既製のファッションでリードしているというのやはりニューヨークの「多様性」ですね。

田中 そうですね。あの多様性というのは日本人にはちょっと理解できませんね。

竹田 多様性というのは各々が勝手だということなんです。日本へ帰ってきてびっくりしたのは、女の人がみんなゾロっとした長いスカートはいてることで。何で

あんなことするんかなあ。神戸でミニスカートはいてる人みかけたことない。ニューヨークでは冬でも天気の良い日にはミニスカートはいて、ヒザまでのブーツで歩いている。寒うなつたら毛皮のコート着てロングスカートをはく。その日その日によって同じ人がほとんど服装を変えていくんです。みんなが勝手なんです。自由という言葉より勝手という言葉がピッタリや。それがファッションのもとになるんですよ。

田中 そうやなあ。おもしろいなあ。

竹田 いつも同じ格好しとって何がファッションや(笑) 服装は地味であってもやっぱり自己主張や。自己主張のない服装というのはファッションの心に値しない。

田中 そうやね。画一なのはダメやね。昨年中国へ行った時、みんなの笑顔や手のたたき方なんか全部が全部同じや。何を聞いてもその答がまたみんな同じや。ちょっと不気味やで。日本人はもっと画一的かもしれないけど。これや、いうとその同じ方向へみんなのエネルギーがダーッと動いていく。

竹田 アメリカ人からみるとこの日本人の行動は恐ろしくみえるらしいね。何しよるかかわからないわけです。

田中 ちょっと無気味やろやね。

竹田 とこで私はファッションが生まれる条件はいくつかあると思うんですが、その一つは県や市や商工会議所や新聞社が何にもせんことだと思っんです。画一化の方向に向けこそすれ、多様化の方向には向けないからです(笑) 一切何にも言わず、商売人がもうけたらいい。ファッションというのは生まれるものであって育てるものじゃないんです。ファッションはあくまで個人のもので、それは多様性の中で生きてる個人なんです。神戸に多様性がなかつたらファッションは生まれません。

田中 そうやなあ。

竹田 ただ服装のファッションには基礎が必要です。たとえばテキスタイルデザインとか、合成加工、染色といった基礎がないといけない。これはファッションの華や

かな世界とは違った地味な技術の世界です。それがないところにはファッションは生まれません。だからその職人の養成と猛烈な自己主張がないとアカン。養成所も芸術大学なんかより、美術学校があったらそれいいんや。

田中 大学と名がついたらもうアカンで。

竹田 ユニバーシティよりもカレッジかスクールの方が特殊専門教育にはいい。だから芸術大学よりも美術学校か美術塾がええんや。

田中 職人がなくなるとここにはコミュニティはなくなりません。ホワイトカラーではアカンわな。

竹田 京都は和服のファッションセンターですが、そこには職人がいるからなんです。美術家とか芸術家ではなくて絵描きがおるからですよ。それに祇園がある。社会の存在しない所にファッションは生まれません。そこでハレしやはるわけや。ハレするところがなければファッションは生まれません。

田中 ハレの日がないとアカンな。

竹田 そのハレの日はたとえ芸術では何に結びつくかというところ、美術でなくて音楽なんです。祇園は音楽の場であって美術の場ではないんです。

ある人に聞いた話では、モスクワのオペラ劇場なんかは地下室全体が客室と同じ広さのクロックになつてるそうです。というのは共産党幹部の奥さん連中が大きな防寒服や長靴を脱いでイブニングやハイヒールに着替えるわけなんです。これがモスクワのオペラなりバレエを文えてるわけなんです。モスクワのオペラやバレエが世界で一流といわれるのはその共産党幹部の奥さんのファッションとかかわりあつているからなんです。

田中 なるほどなあ。

竹田 ニューヨークシティオペラやカーネギーホールで何かやつても、高い所にはいるんな人がいますが、一番いい席には男はタキシード、女はイブニングを着て座つてます。そこでハレするんです。それは音楽が引き出しません。それからエルビスプレスリーから現代に至るまで男

の子のチーチャチンはあれはロックミュージックが引き出したものだし、今のアメリカをはじめとする世界で一番ポピュラーな服装であるジーンズはカントリー・アンド・ウェスタンが引き出したものです。音楽がファッションを引き出すのであって美術ではないということを私はいいたいですね。

今、アメリカのマジソンアベニューの一流広告代理などでコピー書いたり、アートディレクターをやつてるのは髪の毛とヒゲを伸ばし、ジーンズとブルージーンズのジャケットを着、インディアン風の刺しゅうをして、ボクがはいてるようなポロ靴をはいて会社へ出勤してますね。これはカントリー・ウェスタンスタイルや。ジョン・デンプシーや。それは二十七、八才の青年じゃなく、三十七、八才のええ年したオッサンがそんな格好しとるんや。クリエティブな仕事やつとる人のファッションがこのカントリー・ウェスタンや。もう一つのキンキラキンはロックが引っぱり出したもので正式なものはおペラやバレエや。昔は南座の顔見世には祇園の舞子はんはバインとええ着物を着ていき、旦那衆は旦那衆でええ格好していく。

南座の歌舞伎の顔見世はファッションショーやつた。ファッションショーは舞台の方ではなく、舞台を見る側にあるんです。それをつくつたらいいんですよ。

田中 勤め帰りの女の子がコッペパンかじるかウドンすつて六時十五分頃からアタフタと音楽や芝居見に行くあの貧乏くささはいややなあ。

竹田 やっぱ一度家へ帰る時間がないとなあ。音楽会は八時半に始めるべきや。そしたら着替えてこれる。

田中 ニューヨークなんかでは昼の間はバーミューダバンドでハダシで歩いてるような女の子でも音楽会の始まる八時半頃になるとお乳の上バインと開けてものすごい着飾ってくるからね。

竹田 それはアメリカだけじゃなしにソ連にもその豊かさはあるんですよ。それがファッションなんです。